

気づきの質を高める生活科授業の実践的研究

—ルーブリックの作成・活用とカリキュラム・マネジメントに着目して—

梅野 栄治 川上 麻衣子 竹田 有希 間所 泉 永田 忠道 渡邊 巧

Abstract: The purpose of this study is to clarify the curriculum management to enhance the quality of children's awareness in living environment studies. The results of the study revealed that linking living environment studies with other subjects and allowing students to choose and decide their own learning are effective in enhancing the quality of children's awareness.

1. 問題の所在と研究の目的

現代社会は日々変化し続け、その変化は予測困難であり、世界各国で社会の変化に対応するためのコンピテンシーベースの教育が進められるようになった。わが国においても、2017(平成29)年文部科学省告示「小学校学習指導要領」(以下、学習指導要領)において、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱を育成するための、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことが明示された(文部科学省2018)。

朝倉(2018)は、学習指導要領が実現を目指す「主体的・対話的で深い学び」と生活科における「気づき」について、「生活科における学習活動は、具体的な活動や体験を含め多様であり、それは本来深い学びへと向かうものである。その中でも特に気づきの質が高まるような学習は、生活科における深い学びの典型として考えることができる。」(p.26)と述べている。

その一方で、生活科において「気づきの質を高める」ことに関して、様々な研究者や教育現場の教師から、研究上の課題や実践上の課題も指摘されている(井深2018)。そこで、本研究の目的を、生活科における子供達の「気づきの質の高まり」に着目し、研究の目的を「生活科単元において、子供達の気づきの質を見取るためのルーブリックを作成・活用し、教師のどのようなカリキュラム・マネ

ジメントが気づきの質を高めることに有効に働いたのかを明らかにすること」とした。

2. 本研究における「気づき」と「気づきの質の高まり」

本研究における「気づき」については、朝倉や学習指導要領の定義した「気づき」を用いる。本研究における「気づきの質の高まり」については、学習指導要領の定義に基づきつつ、以下のように定義する(文部科学省2018)。

- ①気づきは、「段階Ⅰ『自覚されていない気づき(無自覚な気づき)』→段階Ⅱ『自覚された気づき(個別的な気づき)』→段階Ⅲ『関連付けられた気づき』」の3つの段階で高まっていく。
- ②①の3つの段階は必ずその段階を踏んで気づきの質が高まるのわけではなく、行きつ戻りつしながら、気づきの質が高まっていく。
- ③段階Ⅲ「関連付けられた気づき」を「対象同士を関連付けた気づき」「対象と対象に込められた思いや願いとを関連付けた気づき」「対象と自分自身とを関連付けた気づき(自分自身への気づき)」の3つに分類する。
- ④気づきが段階Ⅲに到達することだけでなく、段階Ⅲにおける3つの関連付けられた気づきを幅広く獲得することも気づきの質が高まったとする。

以上に述べた「気づき」や「気づきの質の高まり」の定義をもとに、子供の気づきの質を高める生活科授業の実践的研究が今喫緊の課題

である。

3. 研究の方法

上に述べた目的を達成するために、2年間の研究計画を作成し、授業実践を通して、子供達の思いや願いをもとに、気付きの質の高まりを実現する単元を開発した。

また、それらの単元において、教師が児童の気付きの質の高まりを見取る手段の1つとして、ループリックを活用した。ループリックについては、共同研究者6名で、記述内容の検討を重ね、実践を通して適宜修正した。

さらに、単元における子供達のワークシートの記述や、教師によるインタビューや対話場面での発話記録、行動観察等を、ループリックに照らし合わせながら、子供達の気付きの質の高まりを検討するとともに、単元の有効性についても検討する。

4. 第1学年「がっこう だいすき」

(1) 第1学年「がっこう だいすき」の目的と調査方法

入学間もない1年生児童は、期待と不安を抱えながら日々生活している。だからこそ、子供

達が学校生活に対する期待や自信、学校に対する愛着をもち、健やかに生活することができるようになることが何よりも重要であると考え。そのような心身ともに安定した日常生活が基盤となり、子供達は小学校で様々なことを学び、経験する中で、子供達によりよく生きる力が育まれていくのではないだろうか。

そこで、本実践では、特に「生活科と他教科や特別活動等をどのように関連付けてカリキュラム・マネジメントすれば、児童の気付きの質を高めることに有効に働くのか」を明らかにすることを目的とした。そこで、生活科の授業観察を行い、教師の発問や子供の発話記録、個別インタビュー記録、ワークシート等を表1の評価基準を用いて分析した。

(2) 単元について

- ①時期 令和5年4月～7月
- ②学年 第1学年1組(31名)
- ③単元名 「がっこう だいすき！」
- ④単元の目標

学校探検を通して、学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことがわかり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにする。

表1 単元「がっこう だいすき」における「気付き」の評価基準

	○評価基準	・児童のパフォーマンス事例
III	○学校の施設の様子及び先生などの学校を支えている人々や、友達をそれぞれを関連付けて気付いている。 【対象同士の関連付け】 ○学校の施設の様子及び先生などの学校を支えている人々や、友達についてそれらが抱いたり、それらに込められたりしている思いや願いとを関連付けて気付いている。 【対象と対象に込められた思いや願いとの関連付け】 ○学校の施設の様子及び、先生などの学校を支えている人々や友達と、自分自身とを関連付けて気付いている。 【対象と自分自身との関連付け】	・学校にあるエレベーターは、給食室から、2階や3階へ給食を運ぶときに使われるんだね。 【対象同士の関連付け】 ・保健室の前の飾りには、みんなに元気に過ごしてほしいという〇〇先生の思いが込められているんだね。 【対象と対象に込められた思いや願いとの関連付け】 ・ぼくは植物が好きだから、この花壇がとても好きだな。 【対象と自分自身との関連付け】
II	○学校の施設の様子及び先生などの学校を支えてくれている人々や、友達に気付いている。 ○学校探検で、色々なものを発見した自分に気付いている。【無自覚な気付きの自覚化、個別的な気付き】 ※自分自身への気付き	・学校には職員室や理科室など色々な教室があるね。 【無自覚な気付きの自覚化、個別的な気付き】 ・学校単元では、たくさんものを発見できるように、頑張って探検したよ。 【無自覚な気付きの自覚化、個別的な気付き】 ※自分自身への気付き
I	○学校の施設の様子及び先生などの学校を支えてくれている人々や、友達に気付いていない。	・ワークシートに気付きを記述できない。 ・伝え合う活動の中で、気付きを伝えられない。児童や保護者、教師の問いかけに対して答えられない。

⑤単元計画（全12時間）

第1次 1-1 がっこう たんけんたい
（導入・探検・振り返り）…6時間

※第1次は、子供達の思いや願い・生活経験を予想し、生活科と道徳の時間や特別活動等とを計画的に関連させた。

第2次 みんな なかよし だいさくせん
（導入・探検・振り返り）…6時間

※第2次は、子供達の思いや願い、生活経験を見取り、生活科と道徳の時間や特別活動等とを柔軟的に関連させた

（3）第1学年「がっこう だいすき！」の調査結果と考察

児童の発言内容や、気付きを伝え合う活動後に記述したワークシート等に表出した気付きがどのような段階にあるのかを、「表1 単元「がっこう だいすき」における「気付き」の評価基準」を用いて、分析した。

以下、「表2 ワークシートの記述から見取った各評価基準段階の達成人数」と、「表3 ワークシートの記述から見取った評価基準段

階Ⅲの記述内容の内訳」を示す。なお、一人の子供が複数の気付きをワークシートに記述しているため、表2の評価基準段階Ⅲに到達した人数と、表3の評価基準段階Ⅲの記述内容の数は必ずしも一致しない。

表2からは、ワークシート①②に、主に段階Ⅱの気付きの表出があったことを見取ることができる。また、ワークシート③④に、わずかだが段階Ⅲの気付きの表出が増えていることが分かる。

また、表3からは、ワークシート①②に、対象同士を関連付けた気付き、ワークシート③④に、対象と対象に込められた思いや願い、対象と自分自身とを関連付けた気付きが多少多く表出していることが分かる。

さらに、表4は、抽出児の気付きを整理したものである。下線部が、段階Ⅲに到達したと判断した気付きである。

（4）カリキュラム・マネジメントの実際

では、子供達は、どのように気付きの質を高めていったのだろうか。ここでは、児童の気付き

表2 ワークシートの記述から見取った各評価基準段階の到達人数

	ワークシート①② 【第2・3時, 第4・5時】 (1-1 がっこう たんけんたい)	ワークシート③④ 【第8・9時, 第10・11時】 (みんな なかよし だいさくせん)	単元終了後 (最終到達人数)
手立て	子ども達の思いや願い、生活経験を予想し、他教科、特別活動等と計画的に関連づけた	子ども達の思いや願い、生活経験を見取り、他教科、特別活動等と柔軟的に関連付けた	
評価基準 段階Ⅲ	5	11	13
評価基準 段階Ⅱ	26	20	18
評価基準 段階Ⅰ	0	0	0

表3 ワークシートの記述から見取った評価基準Ⅲの到達記述内容の内訳

	ワークシート①② 【第2・3時, 第4・5時】 (1-1 がっこう たんけんたい)	ワークシート③④ 【第8・9時, 第10・11時】 (みんな なかよし だいさくせん)	単元終了後 (最終到達人数)
手立て	子ども達の思いや願い、生活経験を予想し、他教科、特別活動等と計画的に関連づけた	子ども達の思いや願い、生活経験を見取り、他教科、特別活動等と柔軟的に関連付けた	
評価基準 段階Ⅲ	5	11	13
評価基準 段階Ⅱ	26	20	18
評価基準 段階Ⅰ	0	0	0

の質を高めることに効果的に働いたと推察されるカリキュラム・マネジメントの実際について述べる。

①切実感のある計画的な学校探検の設定

入学当初の児童は、学校生活に対して様々な不安や期待を抱いている。「学校ってどんなところかな。」「学校のことを知りたいな。」等の、児童が今現在抱いている思いや願いに寄り添いながら、それらを学びの中心に据え、そこに教師のねらいを織り交ぜながら、子供達自ら学びをつくっていくことを大切に、小单元「1-1 がっこう たんけんたい」を設定した。



②道徳の時間と関連させた思いや願い・生活経験の交流場面の設定

1年生になって1ヶ月が経ったころ、道徳の時間と関連させ、ここまでの学校生活を振り返り、今現在抱いている思いや願いを交流する場を設定した。

導入場面では、入学当初の子供達の様子を写真で提示し、1年生になってどんなことが楽しいか交流し、共有する場を設定した。子供達は写真を見ながら日常生活を想起し、共感的な雰囲気の中、それぞれが考えた楽しいことを友達に伝えることができた。



図1 道徳の時間「たのしい がっこう」の板書

終末では、これから楽しみなことや、やってみたいことを、一人一人が星形の付箋に記入し、模造紙に貼り、共有する活動を設定した。完成したものを、子供達は「チャレンジスター」と命名し、「教室に掲示してほしい」という子供達の声から、教室に掲示することとした。

③道徳の時間を契機とした自発的な取組

道徳の授業後、教室に掲示したチャレンジスターを見ながら、「ぼくもこれをやってみようかな。」「これはできたよ。」等の言葉を交わしながら、チャレンジスターを意識して生活している児童の姿や、休憩時間に、チャレンジスターに書いたことに取り組む児童の姿を多く目にした。子供達はこの取組を『かがやき』チャレンジ」と命名し、以後継続的に取り組む活動となった。

④今現在の課題を明らかにし、共有するための

表4 発言内容(◇)やワークシート(◆)の記述に表出した児童⑩の気付き

	ワークシート① (第2時)	ワークシート② (第3時)	ワークシート③ (第8時)	ワークシート④ (第9時)
手立 て	子ども達の思いや願い、生活経験を予想し、他教科、特別活動等と計画的に関連づけた	子ども達の思いや願い、生活経験を予想し、他教科、特別活動等と計画的に関連づけた	子ども達の思いや願い、生活経験を見取り、他教科、特別活動等と柔軟的に関連付けた	子ども達の思いや願い、生活経験を見取り、他教科、特別活動等と柔軟的に関連付けた
児童 ⑩	◆保健室の横にありました。「何かなー」と思いました。 ◇たぶん温度計だと思います。	◆エレベーターがある。給食を運ぶときに便利。 ◇給食当番さんが、2階や3階まで運ばなくてすむから助かる。	◆長岡先生。好きな食べ物はかつ丼。好きな遊びはあっち向いてホイと鬼ごっこ。好きな授業は算数。 ◇優しく教えてくれたからうれしい。面白い先生。	◆好きな食べ物はサーモン。好きな動物は犬。好きな本はヨシタケシンスケさんの本。好きな趣味はダンスと寝ること。 ◆佐藤先生は保健室で、みんなの怪我や病気を治してくれる先生。 ◇保健室には冷蔵庫があって、冷やすものが入っている。

振り返りの設定

6月中旬、4月以後、日常生活の中で継続的に取り組んできた『かがやき』チャレンジ」を振り返る時間を生活科の学習と関連させて設定した。

振り返りでは、多くの子供が、自らの『かがやき』チャレンジ」に対して達成感や満足感を抱いていた。一方で、「みんなと仲良くなりたい。」という『かがやき』チャレンジ」については、「学級の友達や学年の友達、縦割り班の友達とは仲良くなれたが、学校にいる大人の人とは、まだ仲良くなれていないので、もっと仲良くなりたい。」という思いを多くの子供が抱いていた。

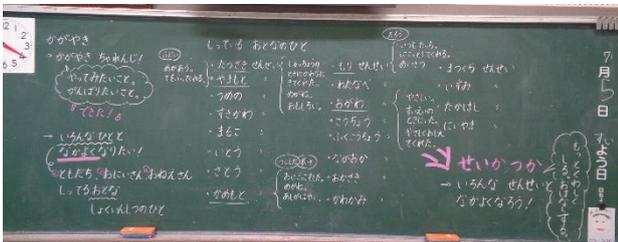


図2 『かがやき』チャレンジ」の振り返りにおける板書

⑤今現在の課題を解決するための学校探検の設定

『かがやき』チャレンジ」の振り返りをもとに、学校にいる大人の人と仲良くなることを目的とした生活科小単元「みんな なかよし だいさくせん！」を設定した。子供達は、生活科の時間や休憩時間等を使って、学校にいる大人の人へインタビューする「みんな なかよし だいさくせん！」に意欲的に取り組み、様々な気付きを獲得するとともに、気付きの質を高めていった。



④道徳の時間と関連させた学校探検の振り返りの設定

「学校にいる大人の人と仲良くなれていない。」という課題を解決するための生活科「みんな なかよし だいさくせん！」に取り組む際の心情や、これからの自分の在り方について交流することが、子供達一人一人の気付きの質を高めるとはないかと考え、本授業を設定した。

導入では、4月の第1次の道徳の時間と同様の資料、第1学年道徳教材「たのしいがっこう（出典：日本文教出版）」を活用した。今回は、児童一人一人が、教科書を見ながら、4月の道徳の学習や、これまでの学校生活を想起できるように、じっくりと時間を確保した。



「学校にいる大人の人とも仲良くなったってことについて、詳しく聞かせてもらえるかな。」となげかけた。すると子供達からは、学校で働く先生や、給食調理員、用務員に関する気付きのみならず、「先生たちはみんな笑顔で優しかったよ。」「先生とタッチできてうれしかったよ。」等の発言が聞かれ、これらの達成感、安心感等を共感的に受け止めた。

さらに、中心発問として、これからの自分の在り方について問うと、子供達一人一人から、「みんな なかよし だいさくせん！」を通して実感できた学校や自分自身へ肯定的な気持ちに後押しされた、「もっと仲良くなりたいな。」「先生たちと〇〇をしてみたいな。」等の前向きな思いが多く聞かれた。



図3 生活科「みんな なかよし だいさくせん！」のワークシート



図4 「みんな なかよし だいさくせん！」の振り返りにおける板書

⑥考察

本実践では、子供達の思いや願いを中心に据えて、生活科の学習と道徳の時間や特別活動等に関連させたり、教材を効果的に活用したりすることを通して、子供達一人一人がより自分事として、切実感をもち、実感を伴いながら自ら学びをつくる姿を目指した。このような児童中心の学びの中で、対象（学校の人・もの・こと）に対する気付きの質を高め、学級や学校で楽しく生活しようとする心情が育まれ、学校への愛着が深まったのではないかと推察される。

4. 第2学年「あつまれ！2年生の森！Part2～2022年冬～」

(1) 第2学年「あつまれ！2年生の森！

Part2～2022年冬～」の目的と調査方法

生活科では、子供達一人一人が思いや願いを実現していくことが学習の中心である。そこで、本実践では、子供達から湧き上がる「これがやりたい！（選択）」「こうしよう！（決定）」という思いや願いを原動力とし、子供達一人一人が自己実現に向けてこれまでの生活経験や既有的知識を活用し、試行錯誤しながら、最後

まで粘り付く取り組み、気付きの質を高める生活科授業を目指した。本実践では特に「子供達一人一人が選択・決定し、気付きの質を高める授業を実現するためのカリキュラム・マネジメントの在り方を明らかにする」ことを目的とし、生活科の授業観察を行い、教師の発問や子供の発話記録、個別インタビュー記録、ワークシート等を表5の評価基準を用いて分析した。

(2) 単元について

①時期 令和4年11月～令和5年3月

②学年 第2学年1組（31名）

③単元名 「あつまれ！2年生の森！」

④単元の目標

「2年生の森」の実現に向けて、「〇〇をやってみよう」という思いや願いを抱き、活動を自分事として捉え、活動に没頭する中で、試行錯誤し、既習の知識や経験に関連付けなら課題解決できるようにする。

⑤単元計画（全22時間）

第1次 各プロジェクトの進捗状況や季節の様子から、これからの活動について考える。…2時間

第2次 各プロジェクトで課題解決に向け

表5 単元「あつまれ！2年生の森！」における「気付き」の評価基準

	○評価基準	・児童のパフォーマンス事例
Ⅲ	○各プロジェクトの実現に必要な対象と対象を関連付けて気付いている。【対象同士の関連付け】 ○各プロジェクトの実現に必要な対象と、それらに込められたりしている思いや願いとを関連付けて気付いている。【対象と対象に込められた思いや願いとの関連付け】 ○各プロジェクトの実現に必要な対象と自分自身の経験や知識とを関連付けて気付いている。【対象と自分自身との関連付け】	・花壇の花も、レモンの木も、自然いっぱいの学校にするためには、どちらも必要なんだね。【対象同士の関連付け】 ・畑で育てている野菜一つ一つに、「みんなに美味しい野菜を食べてほしい」という野菜プロジェクトの友達の思いが込められているんだね。【対象と対象に込められた思いや願いとの関連付け】 ・畑の野菜を大きく育てるためには、1年生の時のアサガオの栽培と同じように肥料をまかないといけないね。【対象と自分自身との関連付け】
Ⅱ	○各プロジェクトの実現に必要な対象（人・もの・こと）に気付いている。【無自覚な気付きの自覚化、個別的な気付き】 ○各プロジェクトにおいて、やりたいことの実現に向けて、粘り強く最後まで活動に取り組んだ自分に気付いている。【無自覚な気付きの自覚化、個別的な気付き】※自分自身への気付き	・自然いっぱいの学校にするためには、花壇が必要だね。【無自覚な気付きの自覚化、個別的な気付き】 ・プロジェクトを成功させるために、私は〇〇を頑張ったよ。【無自覚な気付きの自覚化、個別的な気付き】※自分自身への気付き
Ⅰ	○各プロジェクトの活動を通して、学校の人・もの・ことに気付いていない。	・ワークシートに気付きを記述できない。 ・伝え合う活動の中で、気付きを伝えられない。教師や友達の問いかけに対して答えられない。

て話し合い，活動する。…12時間
 第3次 学級全体や各プロジェクトで「集まれ！2年生の森！」ツアーPart2の実現に向けて話し合い，活動する。…4時間

第4次 学級全体で「集まれ！2年生森！」ツアーPart2を実施する。…4時間

⑥単元の概要

本単元では，子供達が共通に抱いた「生き物いっぱい，自然いっぱいの「2年生の森」をつくりたい」という思いや願いの実現に向けて，子供達一人一人がやりたいことを考え，それらに基づいて4つのプロジェクト（花・木，自然の森，博物館，野菜）に分かれて活動に取り組む。子供達は思いや願いの的の実現に向けて，プロジェクトの活動に取

り進む中で，様々な疑問や困り感を抱くことが予想される。それらの問題を解決するために，友達やその他の人々とのかかわり，試行錯誤しながら，粘り強く栽培活動に取り組む姿が見られるであろう。このようなプロジェクト活動から得た気付きの質の高まりや喜び，自信，好奇心や知的な探求心などは，日々の生活の充実感につながり，子供達の生活を豊かなものにしていくと考えた。

（3）第2学年「あつまれ！2年生の森！

Part2～2022年冬～」の調査結果と考察

子供達の発言内容や，気付きを伝え合う活動後に記述したワークシート等に表出した気付きがどのような段階にあるのかを，「表5 単元「あつまれ！2年生の森！」における「気付き」の評価基準」を用いて，分析した。

以下，「表6 ワークシートの記述から見

表6 ワークシートの記述から見取った各評価基準段階の到達人数

	ワークシート① (第2時)	ワークシート② (第10時)	ワークシート③ (第16時)	ワークシート④ (第21時)	単元終了後 (最終到達人数)
手立て	思いや願いを肯定的に受け止め，それらを膨らませる	「さっそくやってみる」場を設定する	「さっそくやってみる」「繰り返しやってみる」場を設定する	子供達の思いや願いから活動を交流する場を設定する	
評価基準段階Ⅲ	8	14	18	15	20
評価基準段階Ⅱ	23	17	13	16	11
評価規準段階Ⅰ	0	0	0	0	0

表7 ワークシートの記述から見取った評価基準Ⅲの到達記述内容の内訳

	ワークシート① (第2時)	ワークシート② (第10時)	ワークシート③ (第16時)	ワークシート④ (第21時)	単元終了後 (最終到達人数)
手立て	思いや願いを肯定的に受け止め，それらを膨らませる	「さっそくやってみる」場を設定する	「さっそくやってみる」「繰り返しやってみる」場を設定する	子供達の思いや願いから活動を交流する場を設定する	
対象同士の関連付け (評価基準段階Ⅲ)	3	4	3	3	5
対象と対象に込められた思いや願いとの関連付け (評価基準段階Ⅲ)	0	3	3	8	9
対象と自分自身との関連付け (評価規準段階Ⅲ)	5	7	12	4	14

取った各評価基準段階の達成人数」と、「表7ワークシートの記述から見取った評価基準段階Ⅲの記述内容の内訳」を示す。なお、一人の子供が複数の気づきをワークシートに記述しているため、表6の評価基準段階Ⅲに到達した人数と、表7の評価基準段階Ⅲの記述内容の数は必ずしも一致しない。

表6からは、ワークシート①に、主に段階Ⅱの気づきの表出があったことを見取ることができる。また、ワークシート②③④に、ワークシート①と比較すると段階Ⅲの気づきの表出が増えていることが分かる。

また、表7からは、ワークシート①②③に、対象と自分自身とを関連付けた気づき、ワークシート④に、対象と対象に込められた思いや願いとを関連付けた気づきが多少多く表出していることが分かる。

さらに、表8は、抽出児の気づきを整理したものである。下線部が、段階Ⅲに到達したと断じた気づきである。

(4) カリキュラム・マネジメントの実際

では、子供達は、どのように気づきの質を高めていったのだろうか。ここでは、子供の気づきの質を高めることに効果的に働いたと推察されるカリキュラム・マネジメントの実際について述べる。

① 思いや願いを肯定的に受け止め、それらを

膨らませていく（単元序盤）

4月当初、日常の何気ない会話や、子供達の様子、日々の学習から、「光輝（かがやき）」の学習に対して抱いている思いや願いを見取り、肯定的に受け止め、それらを膨らませていった。これらの言葉かけによって、子供達の「やってみてみたい!」「おもしろそう!」などの学習に対する意欲や期待感が高まり、学びたいことを自ら選択・決定する姿につながるのではないかと考えた。

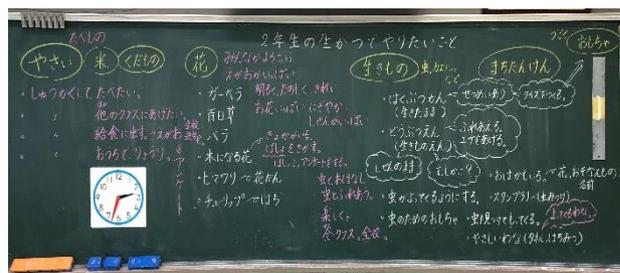


図5 「あつまれ! 2年生の森!」の単元序盤における板書

② それぞれの「やってみてみたい!」を交流する場の設定（単元序盤）

「〇〇をやってみてみたい!」という子供同士で、それぞれの「やってみてみたいこと」や活動のアイデアを交流する場を設定し、学習に対する意欲や期待感が更に高まるようにした。子供達

表8 発言内容（◇）やワークシート（◆）の記述に表出した児童⑳の気づき

	ワークシート① (第2時)	ワークシート② (第10時)	ワークシート③ (第16時)	ワークシート④ (第21時)
手立	思いや願いを肯定的に受け止め、それらを膨らませる	「さっそくやってみる」場を設定する	「さっそくやってみる」「繰り返しやってみる」場を設定する	子供達の思いや願いから活動を交流する場を設定する
児童⑳	◆野菜を育ててみたいな。 ◇野菜を育てて全校のみんなに食べてもらいたいな。	◆チョークは貝殻でできているから畑にまきました。 ◇2組さんが、畑に卵の殻をまいていたので、肥料が必要だと思った。チョークは貝殻でできていることをテレビで見たことがあったので、チョークで手作りの肥料を作った。	◆野菜を売るための八百屋をダンボールで作った。完成してうれしい。 ◆クリスマス雰囲気が出るように、八百屋のお店に飾るツリーを紙粘土で作った。 ◇〇〇さんはいつも熱心に野菜の水やりや肥料作りに取り組んでいる。みんなおいしい野菜を食べてほしいだなと思った。	◆博物館グループはたくさんの人に見てもらえるように、昆虫や石などを工夫して飾っていた。 ◆校内に植えた木も花も、植物プロジェクトの「自然いパイの学校にした」という気持ちがかもっている。 ◇博物館のように、自分たちの八百屋も頑丈に作りたい。

の思いや願いをもとに、木や花プロジェクト、野菜プロジェクト、博物館プロジェクト、自然の森プロジェクトの4つのグループが構成された。



③「さっそくやってみる！」場の設定（単元中盤）

活動のアイデアが膨らんだら、さっそくやってみる場を設定した。実際にやってみることで活動そのものに対して面白さ、やりがい、困り感等を感じることができ、もっとやってみたくて自分事として自ら選択・決定する姿につながるのではないかと考えた。子供達が学習当初に抱いていた「〇〇をやってみたい」という思いや願いは、自分事としての各プロジェクトが本当にやりたい事、実現したいことへと変わっていった。

木や花プロジェクトは、どんな花の種を植えるのか、どこの場所を花壇にするのかを選択・決定し、種を植えた。抜いても抜いても生えてくる雑草に苦戦しながらも、一日何回も様子を見に行き、水やりを欠かさず、熱心にお世話しした。また、花が咲くまでの間に他に何かできることはないかと考え、花壇に手作りの花を飾ったり、冬の寒さで花が枯れないように、花壇に松の葉をしいたりもした。



また、自然の森プロジェクトは、「四角形を組み合わせて巣箱を作ったけど、隙間だらけの歪んだ巣箱になったよ。」「手作りの蜜にはカメムシしかよってこなかったよ。どうしたらカブトムシが来てくれるかな？」など、順調とは言えませんが、失敗や成功を繰り返しながら、少しずつ自分たちがやりたいことを実現していった。



さらに野菜プロジェクトは、苗を植える時期や収穫の時期を考慮して栽培する野菜を選択・決定したり、

野菜の収穫のタイミングを見極めて選択・決定したりしながら栽培活動を自分たちで進めていった。また、野菜栽培と並行して、八百屋さん作りの取組も始まりました。屋根を付けたたり、レジや引換券を用意したり、お店屋さんごっこの練習にも取り組んだりした。



④活動やアイデアを価値づける言葉かけ（単元序盤）

子供達が活動に没頭する中で、それらの活動やアイデアを積極的に価値づける言葉かけをした。それらの言葉かけが、子ども達の自信や達成感、次への意欲へとつながり、ひいては、自ら選択・決定する姿につながるのではないかと考えた。

博物館プロジェクトのAさんは、博物館の改善や広報活動ではなく、展示するものにこだわりを見せて、展示品探しに没頭していた。それらの姿を教師が積極的に価値づけることで、Aさんは、特に、光る石や正体不明のなぞのものに興味を抱き、自分で調べたり、それらの特徴を図鑑にしてまとめたりして、気付きの質を高めていった。



⑤子供達の思いや願いから活動を交流する場の設定（単元終盤）

活動が進んでいくと、「他のグループはどんなことをしているのかな」「みんなにも見に来てほしいな」など思いや願いが子ども達に生まれてきた。それらの思いや願いから、活動を交流する場を設定した。「もっとこうしたらどう？」「ここはこんな工夫をしたんだよ」など、お互いに気付きや工夫を交流し合い、それらの気付きをその後の活動に取り入れた。次の活動を選択・決定したりする姿が多く見られた。友達それぞれ色々な感じ方をしていることに気付き、それ



らに興味をもったり、受け止めたりして、次の活動を選択・決定にする姿につながるのではないかと考えた。

⑥「またやりたい！」を実現するための振り返りの場の設定（単元終盤）

「まだまだやりたい」「もっとよくしたい」という思いや願いから、「どんなことをまだやりたいのか」交流する場を設定しました。それぞれのプロジェクトの「またやりたい！」を交流する中で、議論は自然とこれまでやってきたことの振り返りにも向かい、「自分の成長や課題など」について具体的に振り返り、交流する姿が見られた。目的意識をもって具体的に振り返る姿が多く見られた。



以下は、木や花プロジェクトのMさんのワークシートの記述である。

私は、いつも花壇の周りをきれいにしています。私たちが作業すると、花壇の周りが土や草で汚れるからです。花壇にきれいな花を植えるだけでなく、花壇の周りもきれいにしたら、気持ちもいいし、もっとすてきな花壇になると思います。

改めてMさんの様子を見てみると、Mさんは花壇のそばでいつも箒をもって花壇の周りを掃除していた。Mさんなりに、花壇をよりよくするために選択・決定した行動が、花壇の周りをきれいにすることだったのである。このMさんの記述をクラス全体に紹介すると、Mさんの選択・決定した行動は、周りにも広がりを見せた。Mさんの思いを知った周りの友達もまた、自らの行動を選択・決定したといえるのではないだろうか。

⑦考察

本実践を通して、「子供達の思いや願いを見取り、それらを広げたり、価値付けたり、感動を共有したりする教師の言葉かけ」や、『まずやってみる』『すぐやってみる』『繰り返しやってみる』等、切実感や必然性のある活動が実現できる環境構成や単元構成、時間の補償、「『またやりたい！』『もっとやりたい！』を実現するための振り返りの設定」の3点を大切にされたカリキュラム・マネジメントが、子どもが自ら選択・決定する生活科授業の実現し、気付きの質を高めることに有効に働くことが推察された。

5. 成果と課題

本研究の成果は2点である。1点目は、子供達の思いや願いを中心に据えて、生活科の学習と道徳の時間や特別活動等に関連させたり、教材を効果的に活用したりするカリキュラム・マネジメントが、子供達一人一人がより自分事として、切実感をもち、実感を伴いながら自らの気付きの質を高めることに有効に働いたことが推察されたことである。2点目は、「子供達の思いや願いを見取り、それらを広げたり、価値付けたり、感動を共有したりする教師の言葉かけ」や「切実感や必然性のある活動が実現できる環境構成や単元構成、時間の補償」、「『またやりたい！』『もっとやりたい！』を実現するための振り返りの設定」の3点を大切にされたカリキュラム・マネジメントが、子どもが自ら選択・決定する生活科授業を実現し、気付きの質を高めることに有効に働くことが推察されたことである。

課題は2点である。1点目は、子供達の気付きの質の高まりを見取るための評価基準の信頼性や妥当性、客観性、効率性の担保である。2点目は、児童の気付きや、学びの課程を見取る方法を、さらに検討する必要があるということである。

今後も生活科における評価の先行研究を参考にするとともに、共同研究者と協議しながら、より信頼性や妥当性、客観性、効率性の高い評価基準や評価方法の開発に努めたい。

【引用・参考文献】

1. 井深智子（2018）「『気付き』と学習指導」須本良夫編著『生活科で子どもは何を学ぶか キーワードはカリキュラム・マネジメント』東洋館出版社、pp. 26 - 36
2. 文部科学省（2018）『小学校指導要領（平成29年告示）解説 生活編』東洋館出版社
3. 朝倉淳（2018）「生活科の学習指導要領を読む」朝倉淳編著『平成29年改訂 小学校教育課程実践講座 生活』ぎょうせい、pp. 2-26
4. 朝倉淳（2008）『子どもの気付きを拡大・深化させる生活科の授業原理』風間書房
5. 藤永芳純 他（2021）『しょうがく どうとく いきるちから 1』日本文教出版